



メロス通信 不定期便

韓国社医連研修団を引き受けて 野田浩夫

4月23日から26日まで韓国社会医療機関連合会の11人からなる研修団を山口民医連として受け入れました。丁寧に対応いただいた職員の皆さん、ご協力まことに有難うございました。

韓国社医連は2018年に結成されて加盟事業所90くらいの歴史も浅く、規模もそう大きくはない組織ですが、毎年日本各県の民医連に研修団を送り続ける計画を持っており、山口民医連はその4番目くらいの訪問先ということでした。

今回の研修行程のなかでは、長生炭鉱跡の見学が大きな部分を占めました。研修に同行するものとして事前に資料を探しましたが、伊藤智永（いとう・ともなが）さんという毎日新聞記者の本がとても役立ちました。書影を添付します。ご希望であれば必要部分のコピーを差し上げますのでご連絡ください。

その本にもある韓国人炭鉱夫遺族から日本の「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」にあてた一通の手紙が見学の場面でも紹介されましたが、通訳のファンさんが朗読しようとして涙を流し息をつまらせたことが印象に残りました。



父は山あいの小さな村の農民で、徴用に連行されたきり消息が途絶えました。その時、私は母のおなかにいましたが、父はそのことも知らなかったと思います。長生炭鉱の事故で亡くなったという消息は初めてです。異国の地の海の底にいる父の魂に会いたい気持ちです。父の死亡日時だけでもわかり、感謝いたします。

今回研修に来た人たちが韓国でどんな活動をしているかは、滞在中にはあまり聞けなかったのですが、終了直後の4月26日夜、「NHKスペシャル」がソウルに残った最後のスラムの焼き打ち事件を取り上げているのを見て少し分かった気がしました。

朝鮮戦争終了後の焼け跡にできた巨大スラム群を次々と暴力的に叩き出して首都ソウルはエリートの住む街として近代化されていくのですが、叩き出された人は地方に逃れてもスラムを作って貧しく暮らすしかありませんでした。

研修団からもらった資料を改めて見直すと、今回の研修団に職員を送っていた「新川連合病院」こそ、そういうものであったソウル郊外の新川市のスラムを支援するため数人の若いソウル大出身の医師が作ったものだったのです。

歴史が長いから、規模が大きいからと言って、日本の民医連が韓国の社医連の兄貴分であるわけは絶対ないのです。今後とも互いをリスペクトしあいながら、交流の機会を生み出していきたいと思います。



『ケアの倫理カンファレンス』をふり返り

手探りで始めた「ケアの倫理カンファレンス」も5回目が終了しました。通常のカンファレンスとは違う「ケアの倫理」のカンファレンスには答えがありません。実際にカンファレンスの進行では答えを求めず曖昧に終わるのですから答えの導きようもありません。しかし参加者は求めている答えがあります。それは「探求」という文字に置き換えられ、援助者として自己否定してきた自分の真実の姿、より良き看護・介護のあり方、尊厳を守ることの意味、力不足を感じていても目標に向かって成し遂げる方法、ケア労働者としての明日への活力、それぞれに思いを巡らせ感じ取っていきます。

こうして同じケア労働者として互いを支え、力づけ、「ケアの倫理」という共通課題に立ち向かうのが「ケアの倫理カンファレンス」のスタイルとなりました。「こういう仲間に出会えて良かった」と感じられる方も多いのですよ。

時間内の参加で業務保障が必要になりますが、これからもより多くの方々に参加していただきますようお願い申し上げます。

フードバンク山口

月2回、山口フードバンクに行き食料を提供して頂いています。受け取れるのはひとカゴ分、品物によっては数量制限があり、カゴいっぱいにならないこともあります。それでも生活に困窮した患者さんに届けられる食料があるのは有難く、つながりと共に人々の心を少しでも明るくしてくれています。

